

「豚の生理からみた養豚場の夏季対策」 (3)

かとうスワインクリニック
加藤 仁

6. 日陰樹の利用

南側に面した豚舎に日陰樹を植栽したり、蔓性の植物を栽培して緑のカーテンを作って日陰を作るのも大変効果的です。日陰樹に適している樹木は、落葉広葉樹で成長が早い樹木が適しています。例えば、ニセアカシア、ポプラ、プラタナスなどです。落葉広葉樹は夏季には葉が生い茂り日陰をつくり、冬季になると落葉しますので日が照りやすくなり、夏は涼しく、冬は暖かいという利点があります。プラタナスなどは成長も早く15~20mにもなり、葉っぱも大きく日陰を作るには適しています(図1)。葉っぱにはアメリカシロヒトリの幼虫がつきやすくなりますので定期的に有機リン剤などで殺虫をする必要があります。ポプラなどは老木になると樹木の中が空洞化し、倒木しやすくなりますので気をつける必要があります。

7. 母豚の水遊びが及ぼす仔豚への弊害

飼育者が分娩室へ入って分娩室内通路に散水していないにも関わらず濡れている様な光景が観察されればその個所にいた母豚が暑さに負けて「水遊び」をしたと判断します。この様な「水遊び」は、母豚は自己防衛として必死に「水遊び」をしていますので、むしろ防暑対策として弊害はないのですが、哺乳子豚にはまともに冷たい水がかかります。その水は、自らの哺乳子豚の寝どころである床暖プレートなどにも飛びますので、哺乳子豚が安眠できない状態になります。

または、隣の豚房にまで飛んでいき隣接している哺乳子豚の体も濡らして、やはり安眠できない状態にします。これは、母豚が悪いのではなく、ウィンドレス豚舎のスノコ式分娩房により、母豚が暑熱環境に対して適正な対処ができない環境にあるからなのです。

イノシシや野豚などの放牧状態にある母豚は、暑熱環境でも泥遊びをして沼田場(ぬまたば)を作って体を濡らして体温調節ができるので、極端な水遊びをする必要がないのです。

余談ですが「のたうちまわる」という言葉はこの様にイノシシが泥の中で「ぬたうちまわっている」ことを語源とすることばです。

哺乳仔豚は1日に20数回以上哺乳しています。乳汁を飲む間隔は約1時間で乳汁が出ている時はわずか20~30秒くらいです。哺乳仔豚は乳汁をのまない時は、睡眠をとりながら、摂取した乳汁を消化して体内へ栄養分として吸収して、体内でタンパク質を合成して体の部位の細胞数を増やして成長しています。それが、いきなり母豚の「水遊び」による睡眠妨害があると体温が低下して、成長ホルモンの分泌が低下して発育不全、大腸菌症による腸管壊死、クロストリジウム症に



図1 プラタナスの葉

よる腸管壊死など免疫低下による病状が発現します。その様な母豚の行動は人間から見るとまるで「水遊び」を行っているように見えますが、母豚の自己防衛としてとらえて、哺育仔豚に水がかからない工夫をするのが正しい管理と思われる。床暖プレートなどの仔豚の寝場所の上に簡単な保温箱の様にビニールなどで屋根の様に水除けシートを張って水がかかるのを防止する方法があります(図2)。透明なビニールであれば仔豚の様子も観察できます。波板プレートなどで丈夫につくりますと冬季の保温対策にもなり冬季も使うことができます。

8. 秋の流産症候群「Autumn Abortions Syndrome=A.A.S」

夏季がそれほど暑くなくても7月や8月などの夏季に交配した母豚は受胎率の低下、産子数の減少など繁殖機能低下の現象がみられます。

これは、いのししを祖先とする豚の宿命とも思われる繁殖機能低下現象です。

「豚病学」第三版で小笠晃氏が秋季性流産で執筆されています。引用しますと、いのししやヨーロッパ在来の野豚は1～3月の間に交配・受胎して、6～7月に大部分のものが分娩・哺育をするというものです。これは、1～3月は繁殖季節ですので妊娠を維持する血中プロゲステロンの値が高く、7月～9月などの非繁殖季節には血中プロゲステロン値が低下するからなのです。

豚はいのししから改良された動物ですが、改良により産肉能力は高度化しましたが、本能に基づく繁殖能力は祖先であるいのししの機能がまだ維持されていますので非繁殖季節に交配した母豚に繁殖機能低下がみられるのです。

夏季は暑熱対策だけでなく、授乳中に十分な飼料の摂食、十分なタンパク源の摂取が必要となります。

繁殖に関わるホルモンはタンパク質ですので、摂取した飼料のタンパク質を消化して血中に充分量の遊離アミノ酸を得ることが必要です。

タンパク質を分解し消化するのに有効な酵素としてプロメラインがあります。これはパイナップルの根や茎、実に存在しています。

授乳中にプロメライン製剤を給与するのも秋季流産症候群に対して有効な方法です。(おわり)



図2 水除けシート